令和元年１２月９日
高校ＷＧ（第５回）
参考資料１

# 新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（第１～４回）意見概要

○　新学習指導要領の前文には、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識することができるようにすることが表現されている一方で、実態は必ずしもできていない現状にある。それをどう支えていくのかが大人に課せられた重要な責務である。

○　今回検討する背景にある「学校外での学習時間の減少」「学習意欲の乏しい生徒の顕在化」といったことを変えていくためには、本人のやりたい、学びたいという意欲を高め、主体的に学んでいくという方法を追求するべき。そのためには、小・中学校を通じて学ぶことの意義を理解させ、様々な主体的に学ぶ機会を設け、習慣付けたり経験させたりすることが土台として必要であり、その上で、高校においてもより主体的な学びを促進するような、興味・関心を強く持って楽しく学んでいけるような環境を整備することが重要である。

○　必履修科目の単位数について、絞られてきてはいるものの、それでも多いという面もあるのではないか。

○　多様な学びを推進していくためには、高校間連携や学校外での学習の単位認定等を行いやすくするような環境を整備していくことも必要ではないか。例えば、複数の学校の生徒による合同研究活動を単位認定したり、大学とも連携してそうした活動を大学の単位認定につなげたり、さらには、地域活動や実験実習等の様々な活動を一人一人の生徒が自由に選ぶことができる枠を教育課程の中に設けたり、様々な方法が考えられるのではないか。

○　普通科、専門学科、総合学科という枠にこだわらないような形もあるのではないか。

○　あえて通信制の高校に通いたいという高校生が増えてきている。その背景に、自分たちのやりたいことが自由にどんどんできるという魅力があるからなのだとすると、こうした魅力にも意識して議論する必要があるのではないか。

○　あの校長先生がいたから出来たと言われるような「あの人だから問題」を乗り越え、学校自体が主体的に進化し続けていく持続可能な体制を構築していくことが重要であり、これを実現するために共通して必要となる事項が３つほどあると考えている。１つ目は、属人的なつながりを超えて、市町村、大学、ＮＰＯ等の地域社会と組織的な連携・協働体制、いわゆるコンソーシアムを構築していくこと。２つ目は、学校を地域社会に開いたものとし、この組織的な連携・協働を実現するため、実働を担い組織間をコーディネートする人材を学校側・地域側の双方に配置・育成していくこと。３つ目は、高校と地域社会とが、主体的な対話を通じて、共通のビジョン・構想を作りあげ、その後もＰＤＣＡサイクルを回し続けていくこと。

○　総合的な学習の時間を起点にして、地域と連携して、学校外での学びを含めて探究的な学びを実現するため、昨年までは、地域おこし協力隊として高校と地域をつなぐコーディネーターを各学年に１人ずつ配置するとともに、定例会議を設けて、どのようにすれば子

供たちにわくわくする学びをもたらすことができるかを対話できる体制にあった。一方で、今年は、地域おこし協力隊が全国で引く手あまたの状況であり、計１人しか配置できていない。コーディネーターとなるに相応しい人材をどのように確保するかという点については、国家的な仕組みが必要ではないか。

○　各教科の授業において、旧来型の勉強のままでいいのかという問題がある。教室に仕方なく座っている子供たちが実態として存在すると思われるのに対して、その子供たちの目を輝かせるためにはどうすれば良いのかが大きな課題である。そのためには、各教科の授業の在り方にまで踏み込んで考える必要があるとともに、普通科の類型化を検討するにしても、特定の類型に押し込めるのではなく、子供たちが選択し、その選択の後にも更に自分が望む方に進んでいけるような、自由度のあるものとすべき。

○　現行の学習指導要領においても様々なことが出来るものの、十分に理解されていない面もある。それぞれの学校において、どういう生徒像を描くのか、どんな資質・能力を身に付けさせるのか、といった議論と関連させながら、学習指導要領に基づく具体的な学習をどうしていくのかということも考えていかなければならない。

○　高等学校等への進学率が 98.8%となっているが、この中には義務教育段階の教育内容を十分には理解することが出来なかったにもかかわらず、みんなが行くからという理由で高校に進学した子供たちも存在しており、その子供たちは分からない勉強を更に３年間押し付けられながら過ごしている状況にある。こうした状況を踏まえれば、制度上は同じ高校であったとしても、義務教育の学び直しをやる高校もあれば、専門的な技能を身に付けさせるような高校もあるような、いわば単線型を標榜しながら、その実、複線型を満足しているような方向に進んでほしい。

○　定時制・通信制に在籍する生徒たち、特に通信制に在籍する生徒たちが増えてきており、この生徒たちをどうすれば社会につなげていくことができるのかを考えていく必要がある。具体的に、まず、不登校等の経験がある生徒たちには、実際に学校に来て、そこの担当の先生や周りの友達とコミュニケーションが取り始められるようになることが非常に大きな意味を持つこととなる。そして、高校卒業後にまたすぐ進学や就職するのをやめてしまった生徒たちには、公的な支援のみならず、学校にまた相談することができるように、卒業後の見守りといった仕組みを取り入れていくことが重要である。また、特別な支援を必要とする生徒たちには、商工会議所やＮＰＯ等とも連携しながら、就労移行支援等を行うことが求められている。さらに、外国人生徒たちには、日本語の習得ができないと高校３・４年間を過ごせなかったり高校卒業後の進学・就職どちらもうまくいかなかったりするので、日本社会に一緒に参画できるようになるためには日本語支援が一番重要となる。

○　通信制高校に入学する生徒には、傷付いた体験を多く抱え、学校不信・教員不信の状態で、ゼロではなくマイナスからスタートする生徒も多く在籍している状況にあり、こうした生徒たちは、安心できる環境と関係性の中で学ぶことにより変わっていくことができる。特別な支援が必要な子供たちは現に増えており、マイノリティとは言えない状況の中で、こうした子供たちが排除されることなく、共助といった関係性の中で一緒に生きていける世の中にしていくためにも学校の役割はとても大きなものであり、そうした側面も考えて

いく必要がある。

○　これからの新しい時代に求められる力を育むためには、どのような学びが必要となり、その学びを成立させるためにどのような場や仕組みが必要となるのかを議論していきたい。

○　探究的な学びを全ての高校で実現していく必要があり、それも探究活動だけではなく、各教科・科目の授業も生徒会活動も学級活動もホームルーム活動も、さらには部活動も含めて、学校に来てから帰るまではあらゆる場面で探究的な活動が展開されるべきである。

○　中学生が高校を選ぶときには偏差値等をもとに合格できそうな学校を選ぶ傾向があるが、それ以外の価値観に基づく選択の尺度が必要であり、そのためには、全ての学科を特色化・魅力化していく必要がある。普通科を幾つかの類型に分けることが、却って縛りをかけてしまい特色化を阻害することとならないか危惧している。

○　画一的で効率優先の知識注入型の学びを行ってきていた学校というシステムそのものを、今の時代に応じてどのように変えることができるかが大きな課題である。学校そのものが、子供たちの個性の伸長を阻害するような同調圧力を生む空間ではなく、一人一人が尊重されて、安心して学べる空間になるためにはどうすればよいかを議論していくことが重要である。

○　社会の変化が予測できない時代には世界的に見ても汎用的な資質が求められ、学習指導要領もコンピテンシーベースとなっているのに対して、普通科を目の前のものに変えていくというのには非常にリスクがある。

○　高校は現在でも必履修科目以外の学校設定科目の余地が相当あるものの、自由にできる部分を見失っている可能性がある。本来ならば自由度の高い学校設定科目の中で個別対応の探究を行うべきである。ただ一方で、大学入試が個人の探究成果を評価する段階にまでは至っていないため、妨げになっているのではないか。

○　通信制は、もともと勤労学生のように社会性が備わっていた上で学ぼうとする者を対象としていたのに対して、近年は、家にこもりがちな不登校の生徒のように社会性を身に付けることが課題になっている者も多く対象となっている状況にある。こうした中では、個別対応で全日制高校以上のサポートが必要になってきているため、相当手厚い教育環境を整える必要があるのではないか。

○　教育が経済論理の中に組み込まれ、効率のよさが求められ過ぎている。特に高校生には、その３年間でこれからの生き方を考えることが求められている中で、価値観をどう作らせるかが重要であり、授業や様々な機会を通じてそのための刺激を与え、あるいは学校外でのチャレンジを促し、失敗することも認めてあげることが大事なのではないか。

○　探究も大事ではあるものの、その前には基礎力をしっかりと身に付ける必要があり、そのバランスをどのように取っていくかも重要である。

○　新しい学習指導要領の中でも、総合的な探究の時間や特別活動に本格的に取り組めば、その学校の特色化が図られたり、生徒や先生も成長したりすることができる。

○　探究については、上手くいかなくても、その経験が自分の力になったという面を大学入試も含めて評価してもらえるような価値観が広まってほしい。探究だけに限らず、トライ・アンド・エラーが、生徒にも先生方にも許されるようになってほしい。

○　高等学校時代に学ばなければならないものは何なのか、学校はどうあるべきか、といったことを考えていく必要がある。これまでの中央教育審議会における議論でも重要な提言が幾つか出ているため、高等学校教育部会の審議まとめ、学習指導要領改訂に関する平成28 年答申、あるいは学習指導要領のキャリア教育に関する部分や解説について、関連資料を用意していただきたい。

○　教育再生実行会議第 11 次提言では、全ての高等学校において、生徒受入れに関する方針、教育課程編成・実施に関する方針、修了認定に関する方針を定めるよう提言されているが、これは、どういう資質・能力を身に付けさせるのか、そのためのカリキュラムを用意しているのか、それに堪え得る生徒をどんな方法で入学させるのか、といったことが問われているのではないか。

○　高等学校が三つのポリシーを作ることは必要。現状においても、高校入試や学校評価制度の中で、各高等学校は三つのポリシーに該当するようなものを作っているものの、バラバラで分かりいくいのではないか。ポリシーの作成主体を学校とした場合、各学校が具体性かつ実効性のあるポリシーを作成することができるのかが気掛かり。

○　新しい時代の高等学校教育ということを捉えるときに、入口と出口ということは意識しなければならない。

○　校長がリーダーシップを発揮することが重要。そのためには、校長に必要な資質を身に付けさせるとともに、校長がリーダーシップを発揮できるよう体制を変えていくことが必要。

○　「あの人だから問題」は、無くすのではなくて、あの人だからできる、と言われるような人をたくさん作るべきという発想もある。

○　文系・理系という問題は、どの教科・科目等を学ばせるか（コンテンツベース）ではなく、どんな能力をどの程度育成するか（コンピテンシーベース）、といった視点から考えるべきである。現在の文系・理系の選択は、受験に有利なコンテンツを多く扱うことに重きが置かれているが、そこからどう脱していくかが課題。各学校は、市民として共通に必要となるものを身に付けさせつつ、進路等に応じてより専門に即した形で高度化し、個々の生徒の資質・能力を最大限に生かすことができるような教育課程を、高校３年間を見通して描くことが重要である。今回の新学習指導要領でも、各教科等の指導を通して育成する３つの資質・能力を明確化し、各教科等の目標や内容を再整理されている。

○　高校の在り方は県教委が考えるものだと考えている人も多いが、高校は地域にとって大事な存在であり、地域も一緒に考えていくことが必要である。

○　普通科のカリキュラムを検討する際には、大学入試の準備期間を考慮に入れて、本来は３年間しっかりと行うべき教育プログラムを短くせざるを得ない状況にある。３年間しっ

かり学んだ実績を持って大学に行けるよう、大学入試を含めた高大連携の在り方に関する議論も深めていきたい。

○　定時制総合学科の高校であるが、一人一人特徴を持っている生徒が在籍しているため、一人一人がどれくらい力を付けて、どんな力を付けて巣立っていったのかを見るのは重要なことである。

○　どのような人材を育成するかを考えるに当たっては、学校の中だけでなく、産業界や関係機関等がどんな人材を求めていて、どんなニーズがあるのかを意識することも重要である。また、例えば福祉人材の育成に向けて介護福祉士等の資格を取れる環境を整備するなど、人材を育成する場面でも、教育の現場だけではなく、産業界や関係機関等との連携を行っていくことが必要である。

○　教育理念を具現化する方策として掲げられている、教育理念を様々な方針等にまとめるようなことは、実際には各都道府県で既に取り組んでいる部分があるという点に留意する必要がある。

○　三つのポリシーの策定プロセスにおいて、学校内の関係者が、地元市町村の首長部局や教育委員会、産業界、高等教育機関等と対話を行うことが重要。これが、ポリシー策定後に学校が社会と連携・協働して教育活動を行う鍵となる。また、学校と社会が生産的な対話を行えるよう、学校が社会とのコーディネート機能も併せもつ必要がある。

○　個別最適化の考え方は、児童生徒に最適の教材があるのに出来ないのなら当該児童生徒に問題があるという自己責任論につながりかねない。教材に取り組むこと自体に困難を抱えている児童生徒が互いに支え合う関係を大事にする視点が必要である。

○　高校生活への満足度や学習意欲が低い、学習時間が少ないといったことには、将来に希望が持てていないということもあるのではないか。

○　高校２年生次以降には特定の教科について十分に学習しない例として、進学校で卒業に必要な単位は十分に取れている高校３年生が、卒業するまでの残りの１年間は、予備校で勉強をして、受験に必要のない勉強を学校でしたくないという理由で、通信制高校に転学してきた生徒がいた。彼らの価値観をどこで育てるかといえば、高等学校の中で育てていくことが必要だろう。

○　一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識していくためには、生徒一人一人の主体的な学びの履歴を作っていくことが重要なのではないか。どんな学びを幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校と積み上げてきたのか、さらには大学入試、あるいは高卒で社会に出る場合においても、大学や企業が受け取っていくような社会の仕組みを作っていくことが重要なのではないか。

○　高校生が自分たちの学びに自信がなかったり、学ぶ意欲がなかったりするということには、高校時代が何かの通過点というような捉え方しか彼らができていないからなのではないか。学校と家との往復で学校生活を終わらせるのではなく、もっと外に開いて、子供たちを色々な場面に置いてあげて、たくさんの評価軸を持たせてあげるということが、彼ら

が自分の成長を自分で感じられる部分にもつながるのではないか。

○　複線型の教育制度というのは、日本の今の単線型の教育に足りないものであり、複線型と単線型の融合化を図ることが重要。

○　校長として２～３年しか学校に関わることができないのであれば、例えば、教頭等の別のポジションで長期的に学校に関わってもらうという方法も考えられるのではないか。

○　高校生の多様な資質・能力を評価することにつながるような、様々な評価の開発を進めることが必要。特に探求については、ペーパー試験では測れないものであり、この評価の在り方についてしっかり取り組む必要がある。

○　これからAI時代に子どもたちに必要なものとしては、創造性と社会性である。あらゆる分野において創造性が必要だと考えられるので、そういう学びの基礎を高校のときに身につけることができたら良いと思う。また、それに加えて、多様性の中での協同性をいかに見出していけるかについても考えていく必要がある。

○　定時制課程には、外国にルーツを持つ生徒の割合が大きく、そういった環境において、１クラス４０人配置は多いと感じる。定時制課程における教員定数の在り方など考えていく必要がある。

○　日本語が全くできない外国人生徒をどう教育していくのかについては今後の課題であると認識。また、定時制課程に進学を希望している外国人生徒は在留資格が得られないという問題があるので、他省庁とも連携した対応策の検討が必要ではないか。

○　教員の超過勤務の実態として、部活動指導がかなり占める中で、部活動を学校内だけで抱え込むのではなく、地域社会と連携・協働しながら、部活動の在り方について検討していくことが重要。

○　Society5.0という時代を見据えたときに、通信制課程というのは新しい学びとか高校教育の可能性を開いていくポテンシャルを秘めた部分もあるのではないか。通信制課程においては、例えば、個別最適化された学び、遠隔、ICT の活用等、非常にイノベーティブな動きが生まれつつあると感じている。通信制課程の質の確保・向上という議論に加え、通信制課程の持つポテンシャルについても焦点を当てていくことが必要。

○　外国にルーツを持つ生徒、不登校経験を持つ生徒、あるいは中途退学者など、特別な支援を要する生徒への支援や対応については、学校だけで抱え込まず、学校外の関係機関や外部人材との連携や活用が重要である。

○　ICTの技術の活用による授業改革は、全日制、定時制、通信制の全てに共通して重要。しかし、Society5.0を生きる上で必要となる力を生徒に身に付けさせるためには、最後には教員の役割が重要となってくる。

○　広域通信制高等学校が設置しているサポート校における教育の質の担保について、文科省はガイドラインの策定や点検調査を実施しているが、サポート校における生徒の学びが本当に求められた質を確保できているものなのか危惧している。

○　STEAM 教育については、新学習指導要領下における実践展開の選択肢のひとつとして位置づけることが穏当。新学習指導要領と STEAM 教育との親和性は十分に高い。STEAM 教育の「学際科学」的視点を総合的な探究の時間に導入することは、幼・小・中・高を見通した総合的な学びの体系全体にとっても、大きな可能性がある。

○　理数系の学校以外でも、探究の時間をしっかり生かして、STEAM 教育等を推進していくことは大切だろう。

○　STEAM 教育の導入により、格差が生じる可能性について危惧しており、STEAM 教育は全ての高校に導入する必要があるのか。

○　現在、厳しい立場にある生徒ほど STEAM 教育や探究学習が必要。米国の調査では、ドリル学習だけでは格差が拡大するという結果もある。STEAM 教育のレベルをどうするかは検討の必要があり、エリーティズムではない STEAM の在り方が必要。学習意欲に課題がある生徒には STEAM 教育や総合的な探究の時間は難しいという議論があるが、実際にやってみると全く違う。

○　格差拡大の議論があるが、上位層の生徒を伸ばすことが高校生全体を伸ばすにも有効。AI に立ち向かう教育を議論していくことも必要。

○　STEAM 教育の導入には、現場へのわかりやすさが必要。ステークホルダーの納得をわかりやすく得られるような見えやすい姿があると良い。総合と STEAM 教育をクロスさせる具体的な単元イメージがあったほうが良い。

○　新しい概念が導入される際には、単に通達を出すだけでは先生がわかりましたとはならず、さらには、地域社会の理解を得ることも必要であり、現場の先生方や地域社会への働きかけが必要。

○　リベラルアーツ(Liberal Arts)の考え方は大事であり、何らかの形でこれを導入していくことは絶対必要であると考えている。そのときに、A（Arts）の範囲をいかに幅広くしながら、これからの新しい時代に合ったものを作っていくかというところが重要になってくると考える。

○　課題発見･解決型の学習の一つのプロセスの中で、STEAM教育を位置づけることができ、地域においても STEAM 教育を行っていけると感じた。その際、高校が地域社会に開かれて、大学、研究機関、企業等とつながる体制ができることで、STEAM 教育を探究的な活動にも導入することができると思う。

○　遠隔教育については、小規模な高校の生徒が幅広い学習を行うためには、有効な手段だと感じた。

○　１校１校の授業改善や学校改革を進めるための支援のあり方として、高知県教委のように、県が学校支援チームを設置して学校全体の助言を行うことは、大変魅力的。